



檜野崎燈台の水仙(東牟婁郡串本町)

特集

①高度救命救急センター25周年 ②中央内視鏡部の紹介

CONTENTS

Topics

- 認知症疾患医療センターからのお知らせ ●軽度認知障害(MCI)についてご存じですか ●抗アミロイドβ(Aβ)抗体薬治療について
- 耳鼻咽喉科・頭頸部外科病棟における摂食嚥下支援チームの関わり
- 新たな治療法(整形外科手術分野)の国際的学術誌「European Spine Journal」への掲載について ●あなたの医療情報をスマートフォンで確認 青州リンクPHR機能「NOBORIアプリ」のご案内

Information

- シスプラチン腎毒性におけるトロンボモジュリンの役割を解明
- 青洲基金への寄附目録贈呈式を執り行いました ●免疫力を高める食事のすすめ ●がん患者・家族、県民のための公開講座のご案内
- 和歌山県立医科大学ががん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン市民公開講座「がん専門医療人と地域との連携における課題」 ●マイナ保険証の利用について

広報誌「まんだらげ」の名称について

和歌山を代表する江戸時代の外科医・華岡青洲(はなおかせいしゅう)が全身麻酔薬として用いた植物「曼荼羅華(まんだらげ)」から引用しています。花に「医」の文字をデザインしたものは、本学の校章にも採用されています。

【理念】

私達は安全で質の高い医療を提供し、地域の保健医療の向上に貢献します。

【基本方針】

1. 患者さんとの信頼関係を大切にし、十分な説明と理解に基づく同意を得て、安全な医療を行います。
2. 高度で先進的な医療の研究をすすめ、その成果を反映した医療を行います。
3. 豊かな人間性と優れた専門技術を持った医療人を育成します。
4. 和歌山県の基幹病院として、地域の保健医療に貢献します。

高度救命救急センター 25周年を迎えて



旧医大病院から紀三井寺キャンパスへ

おかげさまで、和歌山県立医科大学附属病院高度救命救急センターは今年で25周年を迎えることができました。その歴史を振り返りますと、1989年3月に高度集中治療センターが篠崎正博先生(後に救急集中治療医学講座初代教授)を中心に設立されました。当時のセンターは旧医大病院(現在の済生会和歌山病院付近の敷地)内に位置していました。

1999年に医大病院が現在の紀三井寺キャンパスへ移転し、翌2000年には救命救急センターに指定されました。そして、2003年に、国公立大学病院および関西圏で初となる和歌山県ドクターヘリが配備され、2011年には高度救命救急センターに昇格しました。以来、和歌山県の救急・災害医療の中核として機能するとともに、医療従事者の育成や県民への救急医療啓発にも貢献してまいりました。





院内外の医療関係者の支援もあり、全国5位の評価に

当センターの救急・集中治療医学の発展は、多くの医療関係者の支援により支えられてきました。特に、院内各診療科からの人的支援により、24時間体制の高度な救急診療が可能となっています。救急・集中治療医学講座所属の医師だけでなく、他科から派遣された医師の協力による高水準の診療が評価され、厚生労働省の公的評価において全国5位(99点)の高評価を得ています。

現在、センターには23名の救急科医師、22名の他科からの協力医師(専攻医含む)、19名の初期研

修医が所属し、ドクターヘリ診療、ER診療*1、ICU*2・病棟管理、災害医療を展開しています。2023年度の救急車搬送件数は5,970件、walk-in患者*3数は5,491件、ドクターヘリ搬送件数は524件、緊急外科手術件数は258件に上り、全国トップクラスのハイボリュームセンターとして、県内外から重症患者を受け入れています。特にドクターヘリは2023年で運航20周年を迎え、累計出動件数はまもなく9,000件に達します。この間、皆様のご支援によって無事故運航を続けることができています。

※1 ER診療…救急外来における中等症から重症救急の患者の診療。
※2 ICU…集中治療室。重篤な患者を治療する病院内の病棟。
※3 walk-in患者…救急外来を独歩で受診した患者。

チーム医療で地域の急性期医療に寄与

当科には、救急外来での診療スキルをはじめ、外傷外科学、集中治療医学、IVR、内視鏡診療といったサブスペシャリティを持つ医師が多数在籍しています。また、他診療科と緊密に連携しながら、質の高いチーム医療を提供できるコミュニケーション能力を備えた医師が揃っています。このような診療基盤を

もとに、今後も先進的かつ前衛的な救急・集中治療医療を展開し、地域の急性期医療のさらなる発展に寄与していく所存です。

これからも皆様のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

和歌山県立医科大学附属病院 中央内視鏡部の紹介

【中央内視鏡部長 北野 雅之】



中央内視鏡部の特徴

和歌山県立医科大学附属病院の中央内視鏡部では、消化器内科医・外科医、呼吸器内科医、救急医、看護師、放射線技師、臨床工学技士など多職種が協力し、診療を行っています。医師は消化器内視鏡学会指導医8名、専門医22名、その他医師30名が内視鏡診療に従事しており、メディカルスタッフは看護師31名に加えて、臨床工学技士8名、放射線技師2名が従事しています。特に、多数の臨床工学技士が、内視鏡を常時メンテナンスすることにより安全な内視鏡診療に貢献しております。

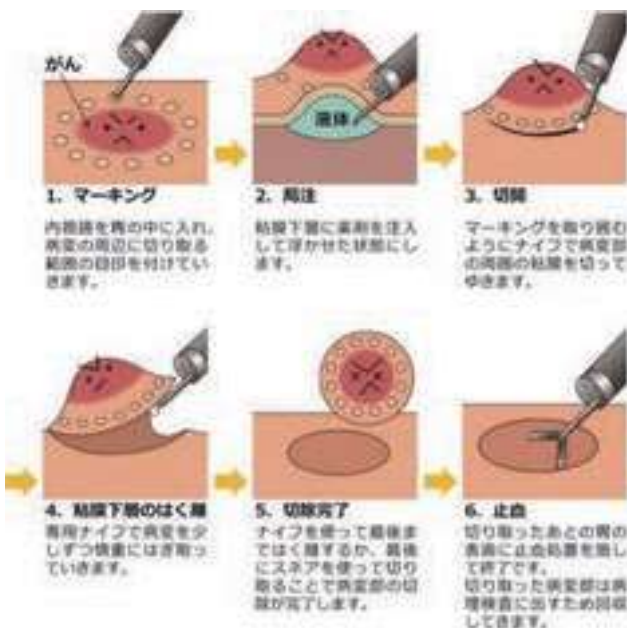
全国でも有数の内視鏡室面積(884㎡)を有し、合計10室の内視鏡室で運営しています。また、広い待合スペース、ナースステーションからリカバリールームを一望できるスペース、患者用トイレと更衣室の確保、個別の空調システム、内視鏡全検査の画像・部屋の様子をリアルタイムでモニタリングできるモニターカンファレンスルームなどを完備しており、安全管理、快適性に注力し、日々の診療を行っています。

診療内容

主に消化器疾患、呼吸器疾患に対する内視鏡診断・治療を行っており、2023年度では、通常内視鏡検査6,190件、特殊内視鏡検査3,303件、内視鏡治療1,954件の計11,447件の実績があり、毎年増加しております。軽微な疾患から重篤なものまで幅広く、市中病

院からの紹介により受け入れています。また、一般的な内視鏡診療のみならず、最先端の診療技術を導入し、新しい内視鏡技術を研究・開発しております。以下より当院における最先端技術の一部(A~D)を紹介します。

A 消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術



消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術は、内視鏡を用いて早期癌を切除する技術です。当院では、全国に先駆けて導入しており、その実施件数は全国トップクラスです。最近では咽喉頭癌や十二指腸乳頭部癌の切除など、他の中核病院ではあまり行われていない治療についても積極的に実施しております。

※咽喉頭癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術(自験例)



▲内視鏡的粘膜下層剥離術の方法(オリンパス社 お腹の健康より引用)

B 超音波内視鏡検査を用いた膵・胆道疾患の早期診断

膵・胆道癌の早期診断に超音波内視鏡が重要な役割を果たしておりますが、当院では、世界に先駆けて高解像度の超音波内視鏡技術を研究開発し、膵・胆道癌の早期発見率の向上に貢献しています。また本年、当院が中心となり造影剤を用いた新しい検査法の研究開発・治験を実施しており、近い将来、実際の診療で使用されることが期待されております。



▲ 超音波内視鏡検査(オリンパス社 ホームページより引用) ※右図は著者作成

C 胆道鏡と衝撃波を用いた胆管結石治療

一般的に、十二指腸乳頭部から内視鏡を用いて胆管結石を除去する治療が行われていますが、結石が大きいと通常の治療では困難となります。その際に、胆道鏡を胆管の中へ挿入し、衝撃波を用いて胆管結石を砕く治療を積極的に行っております。この治療は、一般に他の中核病院では実施されておらず、他の病院で治療が困難であった胆管結石の患者さんは当院に紹介いただいております。



▲ 胆道鏡(左図)、電気水圧衝撃波結石破砕装置(右図)
(ともにポストンサイエンティフィックジャパン社 ホームページより引用)

D 胆道癌に対するラジオ波焼灼術

最近、胆道癌に対して免疫チェックポイント阻害薬を用いた新しい免疫治療が実施されるようになりました。そこで、当院ではこの治療に対し、臨床研究として、胆管癌をラジオ波で焼くことにより免疫治療の効果を増強させる内視鏡治療を実施していま



す。この治療により胆道癌が小さくなり、胆道癌の患者さんの予後が改善することが期待されます。

▲ ラジオ波を用いた胆管の焼灼治療
(ポストンサイエンティフィックジャパン社 ホームページより引用)

啓発活動

2017年より年一回、消化器内視鏡学会の共催のもと「きのくにライブ」と称した和歌山消化器内視鏡ライブデモンストレーションセミナーを開催し、関西地方を中心として、日本全国から約200名の先生方にご参加いただいております。上述しました当院における最先端の消化器内視鏡技術を紹介するとともに、日本を代表する消化器内視鏡医にも診断・治療法を披露していただき、情報共有することで消化器内視鏡技術を向上させるとともに、全国的な教育・発展に寄与しています。

また、当院は和歌山県唯一の特定機能病院、県立病院でもあり、関連病院とのネットワーク構築にも力を入れており、2019年には膵癌センターを設立し、より専門性の高い内視鏡医療に 대응するための体制構築を進めています。その活動のひとつとして、膵癌を早期に診断するため

の「きのくにプロジェクト」と称する地域連携システムを構築し、和歌山県における内視鏡を用いた膵癌早期診断に努めております。



▲ 和歌山消化器内視鏡ライブデモンストレーションセミナー(著者撮影)